

2019年度
新潟大学歯学部同窓会学術講演会のご案内

「咀嚼を測る」ことから何がみえてくるのか？
—人生100年時代の歯科医療の価値を高めるために—

新潟大学大学院医歯学総合研究科 包括歯科補綴学分野
小野高裕 先生

昭和58年 広島大学歯学部卒業
昭和62年 大阪大学大学院歯学研究科修了（歯学博士）
平成10年 大阪大学歯学部助教授
平成26年 新潟大学大学院医歯学総合研究科包括歯科補綴学分野 教授
平成29年 新潟大学評議員、医歯学系副学系長、副歯学部長
現在、東京医科歯科大学、大阪大学、北海道大学、九州大学の各歯学部の非常勤講師



日時： 2019年4月21日（日） 10：40～12：10
会場： 新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」
新潟市中央区笹口1丁目1番地 プラカーカ1 2階
参加費： 無料 事前申し込みは必要ありません。

これからの歯科は、いかにして人生100年時代における健康維持・増進に貢献するかが問われると言われています。増え続ける高齢者の健康状態はそのまま医療費や介護費などの社会的負担に反映されるため、現役世代から健康状態をコントロールし、高齢期におけるフレイル（虚弱）と介護予防に結びつけなければなりません。そのための戦略的な取り組みとして、医療に頼らない「ヘルスプロモーション」が盛んに行われていることはご存知の通りです。

こうした取り組みの一つとして、近年「オーラルフレイル」の概念が導入されました。口腔への無関心から始まるオーラルフレイルは、全身のフレイル（虚弱）の出発点の一つであり、加速要因の一つでもあります。そして、それを早期発見し、一般歯科診療所における治療や指導によって改善するために作られた疾患概念が高齢者を対象とした「口腔機能低下症」です。

「口腔機能低下症」は「口腔不潔」「口腔乾燥」「口唇舌運動機能低下」「低舌圧」「咬合力低下」「咀嚼機能低下」「嚥下機能低下」の7つの下位基準からなり、歯科医師がそれらをチェックして、適切な治療と指導管理を行って改善を図ります。この中には、大きく分けて口腔の「環境」と「機能」が含まれていますが、歯科において最も専門性が高い「機能」と言えば、「咀嚼」に他なりません。

「咀嚼を測る」ことについては、近年非常に簡便かつ正確な検査法が開発され、保険医療にも収載されたことによって、「咀嚼を測る」ためのインフラが整いました。しかし、わざわざ「咀嚼を測る」ことによって、どのようなメリットが得られるのだろうか？わざわざやるだけの価値があるのかなあ？と半信半疑の先生方も多いのではないかと思います。

そこで、今回は、「咀嚼を測る」ことの意味について、補綴治療においてどのようなメリットがあり、患者さんにどのような情報が提供できるのか、さらには歯科医療の価値観をさらに高める可能性、などの観点から、私がこれまで大阪大学と新潟大学で行ってきた臨床と研究の成果をもとに、わかりやすくお話ししたいと思います。

※ 日本歯科医師会会員の先生方は、日本歯科医師会生涯研修事業の単位を取得できます。当日は、ICカードをご持参ください。

お問い合わせ先 新潟大学歯学部同窓会学術部 gakujutsu@dent.niigata-u.ac.jp